

Title	ソレルスの中国(1) : エクリチュールの根源を求めて
Sub Title	La Chine sollersienne (1) : À la recherche de la source de l'écriture
Author	阿部, 静子(Abe, Shizuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.58 (2014. 3) ,p.69- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Hashimoto Junichi = 橋本順一教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20140331-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソレルスの中国（1）

——エクリチュールの根源を求めて——

阿 部 静 子

Celui qui connaît sa clarté se voile
en son obscur. (Lao-Tsé)¹⁾

0.0. 2つの光

0.1. *L'Éclaircie*

1970年冬、フィリップ・ソレルスは自らが主導する季刊文芸誌「テル・ケル」40号に、毛沢東詩10篇の自身による訳を掲載している²⁾。これらの訳詩はその4年後、「テル・ケル」の出版元スイユ社が刊行する「テル・ケル叢書」の1冊、『唯物論について』³⁾に収録された。『唯物論について』は、

-
- 1) Philippe Sollers, « La lecture de Poussin », *Tel Quel* n° 5, 1961, p. 32 からの孫引き。「プッサンを読む」岩崎力訳、新潮社、1966年。）ハイデガーの文中に引用されている老子の言葉。V.V. シュトラウス訳、第18章。ハイデガーは、暗さは秘かに明さを宿しているが、暗さにふさわしい明さを見出すことは難しいと言う。（原註）
 - 2) Philippe Sollers, « Dix poèmes de Mao Tse-toung », *Tel Quel* n° 40, 1970, p. 38。「テル・ケル」誌は1960年、フィリップ・ソレルス他5名のほとんど無名の若者がスイユ社から刊行した季刊文芸誌。「テル・ケル」誌に関しては、Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel*, Éditions du Seuil, « Fiction & Cie », 1995、および拙著『「テル・ケル」は何をしたか——アヴァンギャルドの架け橋』、慶應義塾大学出版会、2011年を参照されたい。
 - 3) Philippe Sollers, *Sur le matérialisme*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1974.

毛沢東詩の他はいずれもソレルスによって1970年から1973年までに書かれた「テル・ケル」誌掲載論文を集めたものである⁴⁾。冒頭の、総題と同名の長大な論文以下、「レーニンと哲学的唯物論」、「矛盾論について」、「毛沢東訳詩」、「革命中国における哲学闘争」となっている。毛沢東訳詩の前の3論文の中心テーマは、マルクスの哲学的唯物論によるヘーゲル哲学の乗り越え、レーニンの史的／弁証法的唯物論および毛沢東によるその継承であり、最後の論文は中国における革命の経過および現状分析について書かれており、毛沢東主義の重要テーゼ「1分而2」（1は分かれて2に）で結ばれている。「矛盾論について」では、毛沢東の著書『矛盾論』の考察に加えてエズラ・パウンド、ブレヒト、バタイユそれぞれの中国への関心に触れ、さらには矛盾の語の成り立ちを説き、早い時期から中国で発達した弁証法について莊子を例に挙げて述べている。これらは、ソレルスの中国への関心を端的に示すものと言える。このような内容をもつ『唯物論について』の序文に、以下の表現がある。

Écrire et publier un tel livre en dehors de toute institution— université ou parti—, peut paraître en France aujourd’hui dépourvu de sens. [...] Qu’est-ce qui domine, cinq ans après Mai 68, la pensée en cours? Encore et toujours le philistin scolaire et l’assis d’appareil. Or ma conviction est que la philosophie doit et devra être faite, à tout moment, par tous; que la critique appartient à tous, surtout cette critique: le marxisme.⁵⁾

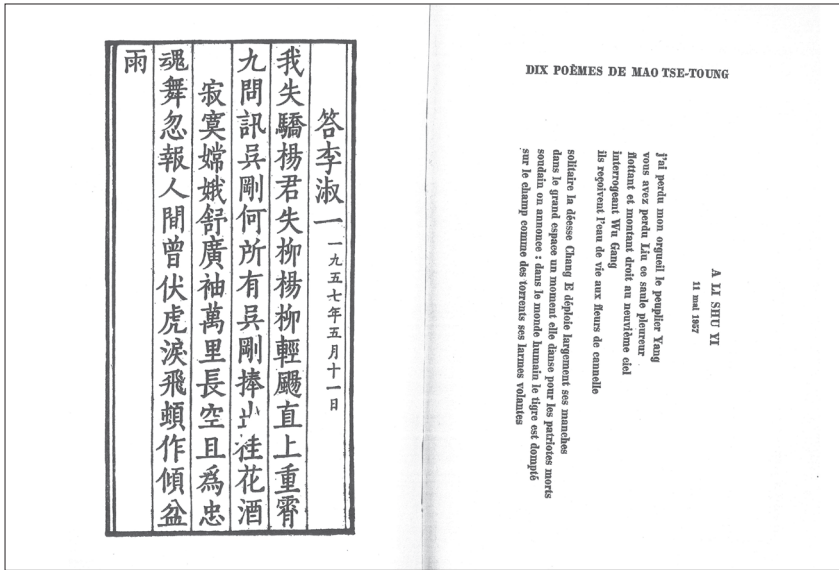
4) Philippe Sollers, « Sur le matérialisme », *Tel Quel* n° 55, 1973, p. 3, n° 56, 1973, p. 5. « Lénine et le matérialisme philosophique », *Tel Quel* n° 43, 1970, p. 3 (「レーニンと哲学的唯物論」菅野昭正訳、「文芸」、河出書房新社、1971年10月号、p. 221), « Sur la contradiction », *Tel Quel* n° 45, 1971, p. 3 (「矛盾論について(抄)」笠井裕之訳、「文芸」、河出書房新社、1994年2月号、p. 268), « La lutte philosophique dans la Chine révolutionnaire », *Tel Quel* n° 48/49, 1972, p. 123.

5) Philippe Sollers, *Sur le matérialisme*, *op. cit.*, p. 5. 強調筆者。

敵を特定し、皮肉な物言いで挑発する——序文に見られる姿勢は、ある意味で当時「テル・ケル」が直面していた困難な状況の反映でもある。すなわち雑誌編集と理論闘争、およびエクリチュールの探求を3本の柱にアヴェンギャルドとしての活動を展開していた「テル・ケル」は、主に政治路線の転換による内紛とその結果としての相次ぐメンバーの離脱、毛沢東主義へのシフトにともなうフランス共産党との断絶という、文字通りの内憂外患の真っ只中にあった。そうした状況下、「テル・ケル」のとった方策は正面突破だった。すなわちマッチオッキ事件⁶⁾を始めとする一連の事件でフランス共産党と派手な喧嘩をする一方で、1972年春「テル・ケル」48/49合併号、夏50号の2回にわたって中国特集を組み、多彩な記事を満載した号を立て続けに刊行したのである。敵を知り己を知ることによって主導権を握り臨機応変に戦う、攻勢の時は一気に攻め、時に奇襲によって勝つ⁷⁾——ソレルスの信奉する孫子の兵法に習った戦法である。孫子の兵法は毛沢東が『矛盾論』に引用し、実戦に活用した理論に他ならない。「テル・ケル」は理論闘争の集団だった。そしてそうした戦闘的な活動を展開する中、一貫して継続されたのがエクリチュールの探求であり、それを象徴するのが、1973年夏「テル・ケル」54号、秋55号と続けて組まれたジョイス特集である。「テル・ケル」のエクリチュール希求の意志は、ウェルギリウスが地獄のダンテを導いたごとく、艱難辛苦を乗り越えるための松明ともなったのだ。こうした状況において、毛沢東詩の翻訳掲載は「テル・ケル」にとって、また早い時期から中国に魅せられてきたソレルスにとってこの上なく重要な意味を持っていた。毛沢東の理論に基づいた戦闘宣言と毛沢東の詩の翻訳掲載——それは世に言う毛沢東の2面性、すなわち哲学を極め詩を書いた文人毛沢東と、戦略家

6) 当時ソビエト共産党との協調を決め、毛沢東主義を警戒していたフランス共産党は、1971年、党のユマニテ祭におけるイタリア共産党員マリア＝アントニエッタ・マッチオッキの著書『中国について』の販売を禁止した。これを受けてソレルスは、『ル・モンド』紙上でユマニテ祭に行かない旨宣言し、「テル・ケル」とフランス共産党の蜜月は終わりを告げた。

7) 『新訂 孫子』、金谷治訳注、岩波書店（岩波文庫）、2000年、pp. 30, 53, 65, 75。



毛沢東とに照応するものでもある。壮大な宇宙とそこに生きる万物を描いた毛沢東詩 10 篇のソレルスによる翻訳、それは戦闘的な 1 巻の論文集『唯物論について』の中であって、そこだけが明るい欣求の空間“*éclaircie*”であるかのようにも見える。*L'Éclaircie* は 2012 年、ソレルスが roman と銘打って刊行した作品のタイトルである⁸⁾。

マネの『草上の昼食』を巡る *L'Éclaircie* は、始まってすぐにその中心テーマである“*éclaircie*”が「私」の幼時の記憶と分かちがたく結びついていることを明かす。

La photo que j'ai sous les yeux a été prise en été par quelqu'un qui s'est assis dans l'herbe pour qu'on voie bien le petit personnage regardant un cèdre. Je dois avoir 2 ans, je suis un bébé bouffi qui lève un visage ravi, à moitié mangé de soleil, vers les branches. Anne, ma

8) Philippe Sollers, *L'Éclaircie*, Éditions Gallimard, 2012.

sœur de 8 ans, est à peine visible, devant les vérandas, sur la droite. [...] J'ai l'impression d'être là, maintenant, dans cette image qui n'est pas pour moi une image, mais une clairière toujours vivante, une éclaircie. [...] Tu reviendras sans arrêt sous cet arbre. [...] Tu peux te cacher dans les fusains, mais le cèdre, lui, te rend invisible.⁹⁾

今でも生き生きと甦るヒマラヤ杉と陽光あふれる隠れ場所——。2才の彼が小石に躓いて転ぶと、悲鳴をあげて駆け寄り助け起こして抱き締めた写真の中の6才年上の姉アンヌは、後になって追い詰められた彼が逃げ込んだ先、この陽光あふれる隠れ場所だった。彼を黙って受け止め救ってくれた姉は、それから時を経ずして亡くなった。“éclaircie”とは、あらゆる人間にとって生存の根源に関わるかけがえのないもの、“raison d'être”をそれと指し示してくれるものの別名に他ならない。

Je rêve d'elle de temps en temps. [...] Le plus souvent, elle est dans le jardin d'autrefois, près du cèdre et des vérandas, dans une éclaircie bordée d'ombre.¹⁰⁾

勝算がなければ戦ってはならない、守勢の時はじっと鳴りをひそめる¹¹⁾——ソレルスは1993年刊行の、秘密情報部員を主人公とした『秘密』の中で孫子を引用している。「時に応じて守備にまわることの才は、はなばなしの攻撃の才に少しも劣らぬものである。」「偉大な將軍たちは弱さのなかからですら力を生み出す。」¹²⁾——“éclaircie”は、そこから転機を窺う場所、逆

9) *Ibid.*, p. 12. 強調筆者。

10) *Ibid.*, p. 24.

11) 前掲『新訂 孫子』、pp. 49, 172。

12) フィリップ・ソレルス『秘密』、野崎欲訳、集英社、1994年、p. 264。(底本は異なるが、それぞれ前掲『新訂 孫子』、p. 137(第十篇)、p. 107(第八篇)が該当。)

転に向けての鋭気を養うところである。「將軍とは、戯曲か本を書こうとしている作家のようなものだ。ところが本はここここで、思いがけない展開を見せたり、あるいは行き止まりになったりして、作家は最初の計画から大幅にそれていくことになる。」¹³⁾——文学創造と戦争との等価性について語るこのプールの言葉¹⁴⁾をソレルスは、孫子との繋がりにおいて捉える。つまり「無限に異なるやり方で状況に対処すること」。「知恵と芸術の汲みつくしがたいこと、まるでハーモニーや、(中略)フーガや、さらには虚無そのものにも比べられる。」¹⁵⁾——戦わずして勝つために、ひたすら逃げる——『フーガの技法』コントラプンクトゥス9番のように¹⁶⁾。2012年刊行のソレルスの *essai* のタイトルは『フーガ』である¹⁷⁾。

1994年8月10日付「リベラシオン」紙にソレルスは、タスリマ・ナスリン宛の手紙を掲載した。バングラディッシュの原理主義者たちに死刑宣告を下された作家ナスリンに向けて大作家たちがこぞって連帯を表明したことを取り上げ、こうした態度が真面目なものであったとしても、彼らを逆説的に脅迫者たちの共犯にしてしまう危険性を指摘している。そしてナスリンに呼びかける。

Ne faites confiance à personne. Ne croyez personne. Sauvez-vous.¹⁸⁾

13) 前掲書、p. 202。Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu III*, Éditions Gallimard, « Pléiade », 1969, p. 760 にある。

14) 前掲書、p. 203。

15) 前掲書、pp. 265, 266。

16) ヨハン＝ゼバスティアン・バッハ『フーガの技法』、1751年、BWV1080。グレン・グールド(オルガン)、1962年、ソニークラシカル。

17) Philippe Sollers, *Fugues*, Éditions Gallimard, 2012。

18) Catherine Clément, *Philippe Sollers*, Éditions Julliard, coll. « Écrivain/Écrivain », 1995, p. 220 からの孫引き。ここでのソレルスと同様の主張は、ジャン＝リュック・ゴダールとジャン＝ピエール・ゴランが1972年冬、「テル・ケル」52号に掲載した「一枚の写真について」に見られる。2人は、女優ジェーン・フォンダがハノイで北ベトナムの人々と語り合う様子を伝える「エクスプレス」誌の写真と記事について、それが「悲劇の表現」でしかないと

この手紙が掲載された日に、タスリマ・ナスリンはバングラディシュを去った¹⁹⁾。

0.2 « DAS AUGENLICHT » (「眼の光」)

1972年秋「テル・ケル」51号巻頭に、ソレルスによる最初の句読点のない作品、「DAS AUGENLICHT」が28ページにわたって掲載された²⁰⁾。タイトルはアントン・ヴェーベルンの混声合唱と管弦楽のための『眼の光』作品26(1935年)からとられている。後に1983年にソレルスは「ヴェーベルン」と題した一文を書いており、『例外の理論』²¹⁾に収録された。その中に、次のようなくだりがある。

J'ai écouté dans la nuit la *Symphonie opus 21* de Webern. [...] Douze sons? Les quatre éléments au cube. L'air solide, l'eau aérienne, la terre changée en respiration, le liquide en feu. J'ai commencé à pleurer. La musique de Webern exige qu'on pleure. [...] Il attend la balle perdue qui le vise. Le hasard dans la mort. Ne dites pas que ce n'est pas écrit dans les notes, cette détonation dont il ne pouvait rien savoir. Vous ne l'entendez pas? L'artiste meurt dans le chaos sans signification du monde. [...] Le corps sanglant sur le trottoir. [...] C'est la guerre. Notre guerre.²²⁾

ソレルスの流す涙は、ヴェーベルンの死と無縁ではない。ヴェーベルンの命を奪ったのは、ヴェーベルンが娘の家のベランダでたばこに火をつけよう

断じ、結果的に読者の目から真実を覆い隠し、逆に西欧メディアに資していることを指摘している。

19) *Ibid.*, p. 220.

20) Philippe Sollers, « DAS AUGENLICHT », *Tel Quel* n° 51, 1972, p. 3.

21) Philippe Sollers, *Théorie des Exceptions*, Éditions Gallimard, 1986, coll. « Folio/Essais ». (『例外の理論』、宮林寛訳、せりか書房、1991年。)

22) *Ibid.*, « Webern », pp. 175 ~ 177. 強調筆者。

とした明かりを、闇取引の合図と勘違いしたオーストリア占領軍の米兵の銃弾だった。元ナチス親衛隊員だった娘婿が闇取引を行っていたためである。ナチス占領中、頽廃音楽のレッテルを貼られ音楽活動が出来なかったヴェーベルンが仕事を再開した矢先の、1945年9月15日のことだった。ソレルスが繰り返し口にする「われわれの戦い」は、ヴェーベルンの悲劇の延長線上にある。ソレルスのこの言葉を理解するためには、処女作『挑戦』²³⁾が、主人公が死に追いやった恋人クレールとの闘いを描いた小説であることから始まって、その後の『女たち』²⁴⁾以降の作品に再三取り入れられている戦争の構図、さらにはインタビューの度毎に繰り返される「戦争」の一語を思い起こせば十分である。ソレルスの戦いは、紙の上で展開される。

notre méthode principale est donc d'apprendre à faire la guerre en la faisant sur la page comme sur la route²⁵⁾

自分は警察に名札・商標をつけられている、とソレルスは言う。厳しい戦いに耐えていけるか、書き、表現し続けることができるか、それとも精神的にやられてしまうか…²⁶⁾。ソレルスがロラン・バルトとともに構想し、バルトの死後1人で実現させた「新・百科全書」3部作の、最初の作品のタイトルは『趣味の戦争』とされている²⁷⁾ところでヴェーベルンについての同じ文章の中でソレルスは、「テル・ケル」51号に掲載されたドイツ語のタイトル

23) Philippe Sollers, *Le Défi*, coll. « Écrire », n° 3, Éditions du Seuil, 1957. (『挑戦』、岩崎力訳、新潮社、1966年。)

24) Philippe Sollers, *Femmes*, Éditions Gallimard, 1983. (『女たち』、鈴木創士訳、せりか書房、1993年。)

25) Philippe Sollers, *H*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1973, p. 120.

26) 「フィリップ・ソレルス 文学の防衛という冒険」浅野素女によるインタビュー。「中央公論文芸特集」、中央公論社、1992年3月号、p. 93。筆者が2008年8月29日にインタビューした際にもソレルスは、繰り返し“la guerre”を口にしていた。(「フィリップ・ソレルスへのインタビュー」慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 N°49-50, 2009年12月を参照されたい。)

27) Philippe Sollers, *La Guerre du Goût*, Éditions Gallimard, 1994.

を持つ1文が、後の『H』であることを明かしている。

Comme le ciel aime Webern, là, bleu-sombre, attentif. Quand j'ai commencé *H*, en pleine crise, je l'ai appelé d'abord *Das Augenlicht*. Le Paradis était encore loin, c'était la direction, dans les ténèbres. Je savais que j'y parviendrais.²⁸⁾

この題名の変更が持つ意味は大きい。ヴェーベルンの音楽に触発された具体的な指標を持つタイトルを、“haschich”（大麻）の略語『H』に変更することでソレルスが意図したのは、作品そのものとタイトルを一体化させることだった。句読記号をなくし、大文字を使わず、改行を一切行わずに単語の並びのみによって緩急自在な文章のリズムを際立たせること、言葉と書かれてある現実とが不可分の文章、息をつかずに遁走する文章は、ハシッシュ抜きにしては考えられない²⁹⁾。「DAS AUGENLICHT」は「テル・ケル」に掲載された翌1973年に、『H』の題名のもとに「テル・ケル叢書」として刊行された。「テル・ケル」掲載の文章と単行本を比較してみると、『H』の冒頭に「テル・ケル」版にはない文章が3ページあまり加えられていること以外には、ごくまれに感嘆詞に改変が見られたりするだけでほとんど違いはない。新たに付け加えられた冒頭の3ページの文章は、自分と父親の名前“Philippe/Octave Joyaux”にまつわる言葉遊びから神話のエピソードへと発展していくもので、プロローグの役割を果たしている。

『H』は、1972年に刊行された『法』³⁰⁾と、1974年に「テル・ケル」掲載

28) Philippe Sollers, *Théorie des Exceptions*, op. cit., « Webern », p. 176.

29) もっともソレルスは、『^{ナンブル}数』(本論考 p. 78 註 34) 参照) が既にハシッシュの影響のもとに書かれたことを後に明かしている。« Nombres est déjà écrit sous haschich, et plus encore les livres suivants, *Lois et H* [...]. » *Un vrai roman. Mémoires*, Éditions Gallimard, 2007, p. 109.

30) Philippe Sollers, *Lois*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1972. タイトルの由来についてソレルスはこう語っている。« Je voulais jouer sur < fa >, clef du caractère chinois qui sert à former < la France > et < la loi >. », « Pourquoi j'ai

が始まり 現在も後継誌「ランフィニ」³¹⁾に書き継がれている、壮大な構想をもつ「天国」(1981年『天国』、1986年『天国II』刊行)³²⁾との間に位置する。「法」も1971年夏「テル・ケル」46号巻頭に冒頭の7ページが掲載されている³³⁾。雑誌から単行本に移行する際の変更は、『法』の場合には『H』とは異なり顕著である。まず第一に挙げられるのは、タイトルに漢字を併記している点は変わらないものの、「テル・ケル」版で7ページの文中に5カ所、先行するフランス語を受ける形でおかれている1文字あるいは2文字の漢字が単行本では消えていることである。具体的には、3ページ目の“de circuler”の後の「通」、 “le flot des torrents”の後の「瀑布」、 “l'écume au front éclairé”の後の「水花」、 “au coton sali de jour et de nuit”の後の「月経」、 “l'angle métallisé”の後の「屯子」である。唯一そのまま残されているのは、2ページ目の「全簡玉字経」であり、次に漢字が現れるのは、本の終わり近くにまとまって4つの熟語が並んでいる箇所のみである。ソレルスによる作品中の漢字の使用は、1968年刊行の『数』³⁴⁾に遡る。68年の5月の事件を予告したとされるこの問題作は、見事な四面体を思わせる4つのシークエンスからなる全体の構成だけでなく、フランソワ・チェンによる手書きの漢字が随所に用いられていることでも衝撃的であった。この点についてソレルスは、次のように語っている。

[...] le récit tout entier de *Nombres* raconte ce que le signe chinois

été chinois », *Tel Quel* n° 88, 1981, p. 26.

31) ソレルスが「テル・ケル」廃刊の翌1983年、「テル・ケル」編集メンバーとともにガリマール傘下のドノエル社から刊行した季刊文芸誌。2008年に100号を迎えた。

32) Philippe Sollers, « Paradis », *Tel Quel* n° 57, 1974, p. 3. および *Paradis*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1981, *Paradis II*, Éditions Gallimard, 1986.

33) Philippe Sollers, « Lois », *Tel Quel* n° 46, 1971, p. 3.

34) Philippe Sollers, *Nombres*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1968. (『数』、岩崎力訳、新潮社、1976年。)

est chargé d'indiquer. [...] Le fonctionnement même de l'idéogramme chinois pour moi c'est tout ce qu'il y a à raconter; il n'y a pas à raconter autre chose.³⁵⁾

ところでソレルスは、同じ漢字を『法』でも一旦は取り入れながら、最終的にはほとんど削除してしまっているのだ。単行本のみに見られるそのほかの特徴としては、文字組みが自由になされているページが目立つこと、文頭の大文字が若干残されてはいるものの、句読法がかなり『H』に近いものになっていること、「テル・ケル」版にあったI(0)、I(I)などの段落表示がなくなっていることである。雑誌掲載から単行本刊行までは、『H』の場合同様1年しか経っていないにも拘わらず、『法』の場合には両者の間にこのように表現上の大きな変化が見られるのである。『数』の延長線上に書き出された『法』は、組幅の点にだけに恣意性を残して、他はほとんど『H』さらには『天国』へと引き継がれる形をとるようになっていく。『数』と『法』の間に見られる相違についてソレルスは、次のように語っている。

Nombres est déjà assez travaillé au niveau du rythme, du battement de l'écriture, mais *Lois* représente un saut qualitatif. Paradoxalement dans *Nombres*, il y a beaucoup plus de références à la Chine, dans *Lois* il n'y en a presque plus et en revanche le français me semble beaucoup

35) Philippe Sollers, « Pourquoi j'ai été chinois », *op. cit.*, p. 29. Jean-Michel Lou は『数』における具体的な漢字の使われ方に関して、例えば「屍」について次のような興味深い指摘を行っている。「Or le signe qui suit ne se trouve dans aucun dictionnaire; il est composé du caractère *diào*, qui veut dire < pendre >, combiné au caractère *shī*, qui veut dire < cadavre >, < corps >. Le signe est comme la lettre volée, offerte à tous les regards, mais vue par personne; ou encore, il est disposé et annoncé comme dans le jeu < trouvez l'erreur > . » *Corps d'enfance corps chinois*, Éditions Gallimard, 2012, coll. « L'Infini », p. 45. François Cheng は中国人で唯一のアカデミー会員。『ティエンイの物語』(辻由美訳、みすず書房、2011年)他、著書多数。ソレルスの雑誌「ランフイニ」にも寄稿している。ソレルスも何本か書評を書いている。

plus travaillé en profondeur. [...] Je crois que *Lois* est inséparable de l'ébranlement de Mai 68, qui m'a forcé à écouter autrement le français.³⁶⁾

[...] tout le monde était en train de se demander ce que c'était que l'apparition de la Chine dans l'atmosphère révolutionnaire. [...] Il y a un peu de chinois, là (= *Lois*) aussi, mais je me préoccupe déjà de tout autre chose, qui est la refonte du français dans un phrasé plus populaire, plus audacieux au niveau de la rapidité d'élocution, du côté direct de l'expression.³⁷⁾

Lois が5月の事件の影響の下に書かれていることは当然だとして、『^{インブル}数』から『法』へ飛躍する際に、ソレルスによれば中国の占める割合が減りフランス語への関心が増したという。だがこの変化の裏で、逆説的に中国が別の形で働いているようにも考えられるのだ。「テル・ケル」誌上の毛沢東訳詩の掲載は「法」掲載の1年前であるが、ここでソレルスは表意文字を句読記号のないフランス語に置き換えることを試みている。この仕事は、新たな表現方法を生み出すに当たって欠くことの出来ない重要な過程であったに違いない。『^{インブル}数』での漢字の使用、さらにはその前作の、ソレルス自身が自分の最初の作品として認める『ドラマ』³⁸⁾が易経の影響のもとに書かれていることは、中国を直接取り込もうとする意図の下になされているが、毛沢東詩の翻訳を経た後のエクリチュールの実験においては、中国が間接的な形で深く関わっていると言えるのではないだろうか。この点には、後に1.2.で再び戻ってこようと思う。「テル・ケル」に掲載された「法」と「DAS AUGENLICHT」の左ページは、いずれも毛沢東の言葉から取られたエピソード

36) *Magazine Littéraire*, n° 65, 1972, p. 15. 強調筆者。

37) Philippe Sollers, « Pourquoi j'ai été chinois », *op. cit.*, p. 13.

38) Philippe Sollers, *Drame*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1965. (『ドラマ』、岩崎力訳、新潮社、1967年。)

グラフとなっている。

Le peintre est poète, il est métaphysicien,
il est au-dessus des pouvoirs, il est discret, [...].
Il est comme la rose d'Angelus Silesius,
« sans pourquoi ». À la question « Pourquoi
suis-je ici? », il répond « Je suis ».³⁹⁾

1.0. « Pourquoi j'ai été chinois »

1.1. 4つの“pourquoi”

1981年夏ソレルスは、終刊近い「テル・ケル」88号に、「Pourquoi j'ai été chinois」と題する中国人女性ジャーナリストによるインタビュー記事を20ページにわたって掲載した⁴⁰⁾。これは後に『インプロヴィゼーション』⁴¹⁾のタイトルをもつ1冊に入れられている。『インプロヴィゼーション』は2部構成で、I部は短い論文5本、II部は対談4本からなっており、対談のタイトルはそれぞれ「Pourquoi j'ai été chinois」、「Pourquoi je suis si peu religieux」、「On n'a encore rien vu」、「Le tri」である。「Pourquoi je suis si peu religieux」と「On n'a encore rien vu」は、それぞれ「テル・ケル」に掲載されており⁴²⁾、特に後者には、「テル・ケル」の存在理由について語られた重要な発言が含まれている。ところで『インプロヴィゼーション』に収録された対談の中、2つが“pourquoi”で始まっていることが注意を惹く。他

39) Philippe Sollers, *Éloge de l'infini*, Éditions Gallimard, 2001, « Un paradis chinois », p. 605. François Cheng の著作、*D'où le chant, la voie des oiseaux des fleurs dans la tradition des Song*, Phébus, 2000 の書評。Angelus Silesius (1624 ~ 1677) はドイツのカトリック司祭。神秘的詩で知られる。バラの詩は代表作の一つ。

40) Philippe Sollers, « Pourquoi j'ai été chinois », *op. cit.*, p. 11.

41) Philippe Sollers, *Improvisations*, Éditions Gallimard, 1991, coll. « Folio/Essais ».

42) Philippe Sollers, « Pourquoi je suis si peu religieux », *Tel Quel* n° 81, 1979, p. 7, « On n'a encore rien vu », *Tel Quel* n° 85, 1980, p. 9.

にもこの時期の「テル・ケル」掲載論文だけでも2回、この語が使われている。すなわち1977年秋71 / 73号アメリカ特集の「Pourquoi les États-Unis?»⁴³⁾ および1981年冬90号の「Je sais pourquoi je jouis」⁴⁴⁾である。ソレルスがこれらの“pourquoi”の語にどのような役割を担わせているかは重要である。これは前衛活動を主導していく上で、常に厳しい状況におかれ続ける中でとられた戦法と無関係ではない。自分たちの言動を非難する敵に対して、相手の攻撃を予測して先制の矢を放つ——すなわち孫子の兵法である。そのためにはまず、敵を知ることが必須であるが、敵を正確に捉えることには常に困難が伴う。すでにソレルスは1966年春、「テル・ケル」25号の「小説と極限の体験」と題する記事の中で、次のように書いていた。

Les ennemis usent bien d'un langage identique s'ils peuvent s'opposer et s'entendre ainsi, et d'ailleurs dans *avant-garde* il y a déjà le mot *garde*. Étrange combat, étrange complicité.⁴⁵⁾

ソレルスの“pourquoi”は、座右の銘である“Never explain, never complain”と呼応している。先手を打って明言した後は、相手の反論に対して言い訳もせず不平も言わない。沈黙を守ってじっと身を潜める——。ところで4回の“pourquoi”の中、精神分析と宗教に関わる内容の2回を除いて、残りの2回は中国に関係したものである。「テル・ケル」は1971年に明確な毛沢東路線を打ち出した後、1974年に中国行きを実現させた⁴⁶⁾。そして毛沢東の死と足並みを揃えるかのようにして1976年冬「テル・ケル」

43) « Pourquoi les États-Unis? », *Tel Quel* n° 71/73, 1977, p. 3.

44) Philippe Sollers, « Je sais pourquoi je jouis », *Tel Quel* n° 90, 1981, p. 7.

45) Philippe Sollers, « Le roman et l'expérience des limites », *Tel Quel* n° 25, 1966, p. 20. 後に *Logiques*, Éditions du Seuil, coll. « Tel Quel », 1968 に収録。

46) ソレルス、ジュリア・クリステヴァ、マルスラン・プレネの「テル・ケル」メンバーの他、ロラン・バルトとスイユ社のフランソワ・ヴァールの訪中団一行は4月11日から3週間、北京、上海などを訪れ、工場、博物館、遺跡などを見学し演劇などを鑑賞して回った。

68号に「毛沢東主義について」⁴⁷⁾を掲載して、「真の毛沢東主義者」を名乗る者たちに喜んで毛沢東主義を返すと宣言し、自ら総括を行った。そしてその直後のアメリカ特集号の冒頭で「Pourquoi les États-Unis?」が使われたのである。ここでの戦術としての“pourquoi”が担った重さは、単なる語の範囲をはるかに超えている。「Pourquoi les États-Unis?」の記事の内容は、中心メンバーのジュリア・クリステヴァ、マルスラン・ブレネとソレルスによる鼎談であり、それぞれによる中国からアメリカへの軌跡が語られている。中でソレルスが、アメリカの魅力の中心にジャズを挙げ、これは後に「ジャズ・マガジン」での対談、「ぼくはジャズ奏者になりたかった」(「テル・ケル」80号収録。⁴⁸⁾へと発展していつている。77年の「Pourquoi les États-Unis?」宣言の後、「Pourquoi j'ai été chinois」の対談に至るまでの4年余は、ソレルスが改めて自身の中の中国を見つめ直すのに必要な年月だったのだ。

1.2. エクリチュール／革命、そして中国

“La seule Théorie capable [...], c'est la Théorie de la pratique théorique [...] : la dialectique matérialiste, ou matérialisme dialectique marxiste dans sa *spécificité*.” Nous appelons *écriture textuelle* le lieu de ce travail entre une pratique scripturale et sa théorie.

ルイ・アルチュセール⁴⁹⁾の『マルクスのために』を引用した上記の文章は、1968年4月、ソレルスがルイ・アラゴン⁵⁰⁾の「レットル・フランセーズ」誌

47) « À propos du « Maoïsme » », *Tel Quel* n° 68, 1976, p. 104.

48) Philippe Sollers, « Jazz », *Tel Quel* n° 80, 1979, p. 11.

49) アルチュセールはフランス共産党の理論的支柱であり、アルチュセールによる擁護は絶えず攻撃にさらされていた「テル・ケル」にとって肝要だったが、アルチュセールはデリダ、ラカンとは異なり、このグループに対して慎重だった。

50) かつてのシュルレアリスト・アラゴンは、ソレルスの作家デビュー時に賞賛を惜しまず、その後もフランス共産党の「レットル・フランセーズ」誌編集

上でジャック・アンリック⁵¹⁾と行った「エクリチュールと革命」と題する対談中にある。この対談は後に、「テル・ケル」の理論探求の成果の一つ、『全体の理論』に収められた⁵²⁾。5月の事件後、前衛運動の先頭に立っていると見なされた「テル・ケル」に対して、各方面からの攻撃は熾烈だった。これに対してソレルスはテキスト理論とマルキシズムで対抗しており、この時期ソレルスが旺盛に執筆していた他の声高な文章中でもこの2つが拮抗している。文学と政治の革命というフランス知識人にとって馴染みの命題が、ここでもその問題性を孕んだまま最高度の強度で繰り返されることになったのである。

L'écriture et la révolution font cause commune l'une donnant à l'autre sa recharge signifiante et élaborant, comme arme, un mythe nouveau: c'est ce qui, dans *Nombres*, est appelé le *récit rouge*, un récit qui porte à la fois la couleur du sang et du seul parti possible dans l'histoire en cours. 革命⁵³⁾

ソレルスによる各々の記事の内容と同様に、5月の事件当時からアメリカ特集までのほぼ10年間、「テル・ケル」掲載記事の方向性は戦闘的な内容のものとエクリチュールの探求に関わるものの両方にわたっている。その事実そのものが、矛盾を行動の契機と捉え、「1は分かれて2となる」と説い

長として「テル・ケル」がフランス共産党とのパイプを築くに際して大きな役割を果たした。

51) フランス共産党系列紙「フランス・ヌーヴェル」時代に「テル・ケル」と接触し、以後ソレルスと緊密な関係を築いている。「アート・プレス」誌を中心に執筆活動を行っている。

52) *Théorie d'ensemble*, Éditions du Seuil, 1968, coll. « Tel Quel », « Écriture et révolution », p. 70. 『全体の理論』は、5月の事件後「テル・ケル」グループが始めた週1回の「理論研究グループ」(Groupe des études théoriques)の活動の成果であり、フーコー、デリダ、バルトの論文を含んでいる。

53) *Ibid.*, p. 79. 結びの「革命」の文字は、『数』の場合と同じく、François Chengの手書き文字による。

た毛沢東の思想を実行しているととれないこともない。当時、いわゆる「毛沢東主義者」たちにはこのことが理解できなかった。だが他ならぬこの姿勢が「テル・ケル」を自らへの問いかけへと導き、その結果「テル・ケル」は生き残ったのだった。

A l'époque, le maoïste disait au telquéliste maoïste; « Pourquoi continuez-vous à faire *Tel Quel*? Pourquoi continuez-vous à écrire? Vous n'avez qu'à fermer votre bureau et vous mettre au service du peuple. » [...] je me suis dit que c'était moi qui me trompais, j'ai essayé de comprendre pourquoi et je crois que j'y suis parvenu. [...] Et *Tel Quel* a continué alors que les maoïstes ont disparu.⁵⁴⁾

またしても“pourquoi”である。Angelusのバラは遠い。

ソレルス作品に最初に中国が現れたのが『ドラマ』であることは、0.2.で触れた。八卦の組み合わせによる六十四卦、陽・陰2種の横棒から成る易経の世界は、ソレルスによって次のような形で取り入れられる。

Déjà *Drame* était construit sur la matrice structurale du *Yi-King*: soixante-quatre séquences alternativement impaires et paires, divisées entre *il* et *je* (entre une ligne simple et une ligne brisée s'engendrant réciproquement à la fois au niveau signifié et signifiant).⁵⁵⁾

ジャン＝ミシェル・ルーは、『ドラマ』執筆時、ソレルスはまだ2年間の中国語学習を体験していなかったと推測しているが⁵⁶⁾、ジョゼフ・ニーダム⁵⁷⁾などの著作に基づく中国に関する知識に加えて、例えば次のようなマル

54) Philippe Sollers, « Pourquoi j'ai été chinois », *op. cit.*, p. 20. 強調筆者。

55) *Théorie d'ensemble*, *op. cit.*, « Écriture et révolution », p. 72.

56) Jean-Michel Lou, *Corps d'enfance corps chinois*, *op. cit.*, p. 33.

57) 大著『中国の科学と文明』の著者。「テル・ケル」は1972年春と夏48／49

セル・グラネの文章などを通じて中国語への理解を深めていたと思われる。

“Le mot, écrit Granet, de même qu’il ne correspond pas à un concept, n’est pas non plus un simple signe. [...] Dans sa forme immuable de monosyllabe, dans son aspect neutre, il retient toute l’énergie impérative de l’acte dont il est le correspondant vocal — dont il est l’emblème.⁵⁸⁾

ソレルスは、中国文化紹介と漢字の使用に関してエズラ・パウンドが果たした先駆的役割の重要性を認めつつも、『^{インブル}数』における漢字の使い方はパウンドが『^{カントーズ}詩篇』⁵⁹⁾で用いているような装飾的でエキゾチック、アルカイックかつ封建的な方法とは異なるものであると言い、次のように表現する。

Ici, les idéogrammes font partie de la narration; ils jouent comme force graphique de base sur laquelle vient se briser l’écriture phonétique, ils la traduisent dans ses effets terminaux (de telle façon qu’un membre de phrase *saute* ainsi du français au chinois).⁶⁰⁾

『^{インブル}数』についてソレルスは、この作品の中国との関わりは漢字の使用にとどまるものではなく、タイトルが中国における数の概念と緊密に結びついていること、そしてそれがソレルスの中国への関心の根底をなす東洋と西洋の交流へと通じるものであることを述べている。

号および50号の中国特集にニーダムの「東洋の時間と人間」を分載したほか、1974年秋59号特集「中国で」では対談を行ない、孔子と老子、西洋との関連などについて話し合っている。

58) *Théorie d’ensemble, op. cit.*, « Écriture et révolution », p. 73.

59) 「テル・ケル」は、1961年6号と1976年68号にパウンドの『^{カントーズ}詩篇』を掲載している。第2次大戦中の反米的言動によって厳しい批判にさらされていたパウンドの詩をいち早く評価し、取り上げたのである。

60) *Théorie d’ensemble, op. cit.*, « Écriture et révolution », p. 77.

Pour la culture chinoise, le nombre joue — a joué, parallèlement à la pensée scientifique — un rôle mythique des plus importants. Il m'a semblé que le “pont” entre Orient et Occident se situait à ce niveau non pas abstrait mais concrétisé par un rendement linguistique massif. *Nombres*: sous ce titre, un faisceau extrêmement complexe de significations précisément trans-culturelles, trans-linguistiques apparaît.⁶¹⁾

「エクリチュールと革命」の1年後に、「テル・ケル」38号に掲載された「いくつかの矛盾について」⁶²⁾と題された記事も、この時期の他の記事同様、階級闘争、ブルジョワ・イデオロギー、文化革命といった語で埋め尽くされている一方で、文末に毛沢東の詩「冬雲」の2通りの訳が掲載されている。2号後に、ソレルスの訳によって掲載された10篇の中の1篇である。1つ目の訳は「レルヌ」誌に掲載されたもので、2つ目はソレルスによるものである⁶³⁾。詩の訳に先立つ記事の中でソレルスは、「レルヌ」誌掲載の訳はアカデミズムによって西欧文化に引き寄せられたものであるとして否定し、自身の訳をより現代的なフランス語による、より表意文字の働きに近い訳として提示している。ソレルスがとった方法は、句読点のない、大文字を使用しない逐語訳に近い翻訳である。表意文字に魅了されていたソレルスは、この方法をとることで、宇宙の森羅万象を微細なものから広大なものまで描き出そうとする毛沢東詩の息づかいを直接移し取ろうとしたに違いない。

61) *Ibid.*, p. 75. 2008年の筆者のインタビューでもソレルスは、18世紀に強い関心を持つ理由として当時の東西交流を挙げている。

62) Philippe Sollers, « De quelques contradictions », *Tel Quel* n° 38, 1969, p. I.

63) *Ibid.*, p. VIII. 1つ目の訳は *Poésies complètes de Mao Tse-toung*, traduites et commentées par Guy Brossollet, *l'Herne*, 1969. 強調筆者。89頁の図版は、「テル・ケル」40号の「冬雲」掲載ページ。

Nuages d'hiver

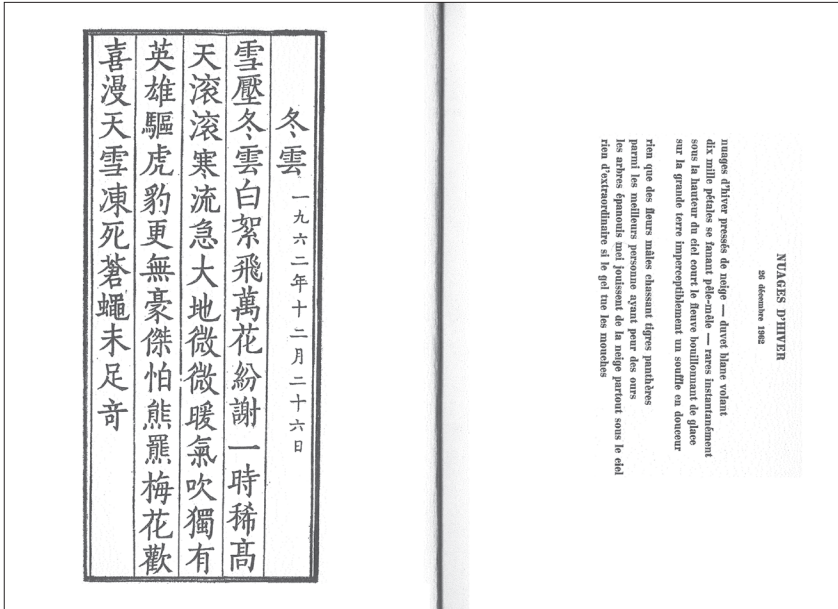
1. Les nuages d'hiver sont lourds de neige — blanche bourre en vol;
 Par myriades, pêle-mêle les fleurs se fanent et d'un coup se font rares
 Dans le ciel tourbillonne, tourbillonne la meute des courants glacés;
 La terre immense doucement, doucement exhale son haleine.

Un héros seul va chasser le tigre ou le léopard
 Et aucun homme courageux ne craint les ours.
 Les fleurs de prunier se réjouissent d'un ciel empli de neige.
 Qui peut s'étonner que le gel fasse crever les mouches?

2. nuages d'hiver pressés de neige — duvet blanc volant
dix mille pétales se fanant pêle-mêle — rares instantanément
 sous la hauteur du ciel court le fleuve bouillonnant de glace
 sur la grande terre imperceptiblement un souffle en douceur

rien que des fleurs mâles chassant tigres panthères
 parmi les meilleurs personne ayant peur des ours
 les arbres épanouis *mei* jouissent de la neige partout sous le ciel
 rien d'extraordinaire si le gel tue les mouches

両方の訳の後に簡単なコメントが載せられており、語句単位では、“dix mille”は“myriades”ではないこと、“dix mille”と“partout sous le ciel”の2つは、中国語の伝統的な表現であるためこれらを使用したと述べている。また「英雄」の一般的な訳語“héros”の代わりに“fleurs mâles”を用いたのは、この詩の至る所にみられる動植物にまつわる語群、および性的なものへの暗示と同調させるためであると説明している。1の訳におけるアカデミズムについてはさておき、2の訳では句読法から解放された各行は軽やかに



躍動し、天と地は壮大なままにより身近に感じられるようになっている。また「レルス」誌の訳では、“tourbillonne”, “doucement” の語が繰り返されているが、原文で該当する語が繰り返されているとはいえ、漢詩中の一語がもつ簡潔な響きが消えてフランス語の長い綴りが目障りに目立ってしまっているように思われる。語の繰り返しは、例えば次のような形でならば文章にスピードとリズムをもたらすのではないだろうか。

ou encore le nuage doré de l'enchantement ruisselle en bas en sons amis en sons rapides ou encore il se contente du battement des ailes ou encore les bêtes se regardaient l'une l'autre⁶⁴⁾

後にソレルスはこの翻訳の政治的意図と、具体的にとられた方法およびそ

64) Philippe Sollers, *H, op. cit.*, p. 15. 強調筆者。

れによって得られる効果に関して、次のように語っている。

J'ai fait ces traductions-là de façon très provocatrice pour en partie démontrer que la façon dont le chinois était traduit d'habitude par les lents professeurs occidentaux restait prisonnière de formes académiques et qu'elle ne donnait pas la traduction littérale, directe, de cette espèce de condensation télégraphique, de cette longueur d'ondes différente du fonctionnement. Je crois que c'est une des premières fois où on a traduit du chinois d'une façon qui essayait d'être le trait même de la chose sur la page, en supprimant les pronoms, les indéfinis, les « le », les « de ». L'effet à produire était celui d'une « nappe de ciel sans couture ». ⁶⁵⁾

本論考の0.2.において、雑誌掲載時の「法」が単行本になる際に被った変更、および『^{インフル}数』と『法』のエクリチュールの間に見られる飛躍について述べた際、それらにこの翻訳が影響を及ぼしている可能性を示唆したが、これまでみてきたことから、ここでの体験が1981年の対談で次のようにいわれる点に関して極めて重要な役割を果たしていることは間違いないだろう。この翻訳はソレルスの仕事の系譜において肝要な位置を占めているだけでなく、改めてソレルスにおける中国についての考察へと誘うものでもある。

Ce qui me préoccupe à ce moment-là, c'est-à-dire vers les années 67-68, c'est en effet de trouver — je sentais que la rhétorique occidentale ne marchait plus — une construction de langage qui serait susceptible d'intégrer cette expérience chinoise et de fabriquer une autre phrase de part en part. [...]: c'est à peine depuis sept ou huit ans que j'ai

65) Philippe Sollers, « Pourquoi j'ai été chinois », *op. cit.*, p. 25. 強調筆者。Ph. フォレストも同じ文章を引用し、この翻訳が『天国』へと繋がるものであることを指摘している。(Philippe Forest, *Philippe Sollers*, Éditions du Seuil, 1992, p. 213.)

trouvé mon régime continu d'écriture, c'est-à-dire avec des tas de petites subtilités techniques comme la suppression de la ponctuation ou la métrique extrêmement répétitive. Mais enfin tout ça vient d'une certaine façon de la Chine.⁶⁶⁾

1976年、毛沢東の亡くなった年の夏、「テル・ケル」66号に毛沢東詩2篇のソレルスによる翻訳が再度掲載された。

1.3. « Devenir chinois »⁶⁷⁾

ソレルスの中国への最初の関心は古く、幼少時の記憶にまで遡る。

Et les Japonais? [...] Papa, en faisant tourner le globe de la bibliothèque, me montre la tache allongée jaune clair où ils marchent déjà au soleil pendant qu'ici il fait nuit. La large étendue jaune foncé, en revanche, à gauche, est la Chine. [...] C'est décidé: j'irai voir un jour ce qui se passe là-bas, par-delà la sphère de bois peint, dans le jaune profond, en Chine.⁶⁸⁾

同じ決意は、リセのイエズス会士の教師が語ってきかせたかの地の話によって固められた。

Descriptions, détails, Pékin, Nankin, Shanghai, tout à coup, dans les nuits d'hiver de Versailles...Rizières au bout du parc du château...Matteo Ricci, Lao-tseu traduit par Wieger, la tradition, quoi...Jamais un mot sur la Chine au lycée, je le jure...C'est à ce moment-là que j'ai décidé d'aller

66) *Ibid.*, p. 24. 強調筆者。

67) Philippe Sollers, *Fugues*, *op. cit.*, p. 227.

68) Philippe Sollers, *Studio*, Éditions Gallimard, 1997, p. 38. 強調筆者。

en Chine, plus tard.⁶⁹⁾

だが膨れあがった夢は、品行不良のせいでもりせを追われ1年半で家に送り返された苦い思い出と分かちがたく結びついていた。それからほぼ30年後、長年の夢を実現し、文化革命下の中国に出かけていったソレルスたちを待ち受けていたのは帰国後のバッシングの嵐だった。中国はソレルスにとって常に厳しい状況とともにあったのだ。自己批判を行った後でもその現実が変わらなかった。しかしソレルスは以前から、「自分の中国」がどこか別のところにあることに気づいていた。「ソレルスの中国」とはどのようなものだったのだろうか。

Je ne suis jamais retourné en Chine. Pas envie. La Chine qui m'intéresse est une Chine intérieure. Absolument, oui, je crois. On m'a beaucoup tapé dessus avec l'histoire dite maoïste, mais ça n'a jamais été ça.⁷⁰⁾

C'est par une expérience mentale et physique que je suis arrivé à m'intéresser à la philosophie chinoise, à la poésie chinoise et à la disposition du corps chinois par rapport au langage et à l'écriture. J'étais attiré par ce qui va être une constante dans mes intérêts à cette époque-là, par le taoïsme. Il s'agit d'abord d'une expérience érotique.⁷¹⁾

J'ai toujours ce rêve que la première écriture est chinoise, la chose la plus fondamentale, la tortue qui sort de l'eau avec ses signes qui apparaissent sur la surface qui au départ ne sont même pas tracés mais qui ressortent de la surface elle-même.⁷²⁾

69) Philippe Sollers, *Portrait du Joueur*, Éditions Gallimard, 1985, p. 84. 強調筆者。

70) Philippe Sollers, *Fugues*, *op. cit.*, « Shanghai: corps et silence », p. 238.

71) Philippe Sollers, « Pourquoi j'ai été chinois », *op. cit.*, p. 11.

72) *Ibid.*, p. 28.

Il est certain que la technique érotique chinoise, ce qu'on peut deviner de l'utilisation, [...], de l'érotique chinoise me paraît, dans ses rapports avec la poésie, la peinture, la mystique, quelque chose de très particulier. Je n'en trouve pas trace dans les autres cultures.⁷³⁾

On comprend, dès lors, que la peinture et la poésie sont, en Chine, placées, en même temps que la pensée, dans un autre espace.⁷⁴⁾

「内なる中国」——ソレルスが惹かれる中国とは、まず第一に老子の中国であり、西欧よりはるかに古い歴史のうちに独自の文明を發展させてきた国、起源の言語・表意文字を有しエロティシズムの伝統をもつ国である。ソレルスは絶えず中国への愛を口にし、次の『天国』の1節に見られるように著書にも再三、書いている。そのようなソレルスはまた、以下のような望みを繰り返し口にするソレルスでもある。

*et elle était là mince opaque plus vieille rivière de chine encrier lent
courant serpentant c'est là que l'écriture est née [...] c'est la chine et
j'aime la chine j'en rêvais avant de savoir qu'elle vivait mon système
nerveux*⁷⁵⁾

Dans 30 ou 40 ans ou 50 ans, mon rêve c'est d'être mentionné dans un dictionnaire chinois, « Écrivain européen d'origine française qui très tôt et constamment, s'est intéressé beaucoup à la Chine. »⁷⁶⁾

73) *Ibid.*, p. 24.

74) Philippe Sollers, *Éloge de l'infini*, *op. cit.*, « La Voie chinoise », p. 589.

75) Philippe Sollers, *Paradis*, *op. cit.*, pp. 106, 107. 強調筆者。

76) 前出「フィリップ・ソレルスへのインタビュー」、p. 278。他にも著書の随所で同じ言葉が見られる。

それにしても、次のような文章を書き、以下の陶淵明の詩に魅せられるソレルスは、すでに十分「中国的」ではないだろうか。

La « Voie » chinoise s'écoule et ne va nulle part. Elle était là, elle est là, elle sera là, sans cesse la même et jamais la même.⁷⁷⁾

La Chine, pour moi, c'est vraiment le dehors du dedans qui reste interne, tout en étant totalement dehors.⁷⁸⁾

*Je lis la chronique des temps très anciens,
Je regarde les images du vaste monde.
Je dis oui à l'univers. Si cela n'est pas
Le bonheur, où donc est le bonheur?*⁷⁹⁾

中国の賢者について語りながら、矛盾を恐れない毛沢東に賛同していた自分を思い出してはいないだろうか。カトリーヌ・クレマンは、1995年の時点で、相変わらずソレルスを毛沢東主義者と呼んでいる。

Le sage reste ouvert, disponible, spontané, il dissout les contradictions, il agit comme une musique silencieuse.⁸⁰⁾

Eh bien, voilà! *Un*: ne pas craindre les contradictions. *Deux*: faire la guerre. [...] Son maoïsme personnel n'a pas changé d'un iota.⁸¹⁾

77) Philippe Sollers, *Éloge de l'infini*, op. cit., « La Voie chinoise », p. 589.

78) Philippe Sollers, *Fugues*, op. cit., « Shanghai: corps et silence », p. 241.

79) Philippe Sollers, *La Guerre du Goût*, op. cit., « La Chine, toujours », p. 430
からの孫引き。

80) Philippe Sollers, *Éloge de l'infini*, op. cit., « La Voie chinoise », p. 590.

81) Catherine Clément, *Philippe Sollers*, op. cit., p. 139.

ソレルスは40年前、中国がソ連や資本主義世界の植民地になることを案じていた時同様⁸²⁾、中国への理解を促し呼びかける、窓を開けようではないか、と。

[...] : la Chine est *aussi* une expérience intérieure, universelle, qui devrait être accessible à tous; une recomposition de l'espace et du temps, de l'audition et du geste, que notre civilisation planétaire, monomaniaque, affairiste, puritaine et morbide, ne peut que vouloir déformer et nier. Si nous voulons aider les Chinois dans leur dur combat pour la démocratie, commençons par être un peu plus chinois nous-mêmes: ouvrons les fenêtres, de l'air.⁸³⁾

『淮南子』がプレイヤード叢書に入ったことを喜ぶ文章の中に、次のような箇所がある。ソレルスには、“pourquoi”の行き着く先に“éclaircie”があることが分かっているのだろうか。

On est convaincu sans savoir pourquoi, le comment s'impose au pourquoi. [...] Nous qui vivons désormais sur une planète de plus en plus lourde, fermée, bavarde, morbide, nous écoutons ces messages comme s'ils venaient d'une éclaircie que nous refusons de voir. « Les hommes d'autrefois appréciaient les saveurs sans être avides; ceux d'aujourd'hui sont avides sans apprécier les saveurs. »⁸⁴⁾

(続く)

82) Philippe Sollers, « Mao contre Confucius », *Tel Quel* n° 59, 1974, p. 15.

83) Philippe Sollers, *La Guerre du Goût*, *op. cit.*, « La Chine, toujours », p. 429.

84) Philippe Sollers, *Fugues*, *op. cit.*, « Un livre sans fin », pp. 182, 183. 強調筆者。